

裏松固禪の著作活動について

—『大内裏図考証』の編修過程を中心として—

詫間直樹

はじめに

近世後期の有職故実や建築史の分野において、裏松固禪（光世、一七六一—一八〇四）の名は夙に有名である。固禪およびその著作に関する研究は早くより行われており、近年では、藤貞幹書簡「無仏齋手簡集」「蒙齋手簡」や裏松家本『集』の検討から寛政年間を中心に固禪の研究活動が細部にわたって明らかになってきた。⁽²⁾ また建築史学の方面でも、寛政度内裏造営における固禪の役割は古くから論じられ、最近も同様の研究が積み重ねられている。⁽³⁾

しかし固禪の著作活動を全体的に見渡す研究は、桜井秀・西井芳子両氏の論考があるのみであり、⁽⁴⁾ 主著『大内裏図考証』については、石村貞吉・西井芳子・吉田早苗・福田敏朗ら各氏の研究があるものの、⁽⁵⁾ その後は進展しておらず、同書の作成契機や献上本完成以後の校訂作業など、なお不明な部分も少なくない。こうした研究状況に鑑み、本稿では、固禪の代表的著作たる『大内裏図考証』の編修過程の検討を通じて、固禪の著作活動の実態を明らかにしたいと思う。⁽⁶⁾

『大内裏図考証』は、平安京の構成および平安宮の宮城門・朝堂院・豊楽

院・中和院・内裏・諸官衙・真言院などの位置・構成・変遷等につき、諸史料を駆使して考証した書である。現在は刊本として新訂増補故実叢書本が広く用いられているが、⁽⁷⁾ いうまでもなくこれは内藤広前（一七九一—一八六六）の補正本に基づいたものであり、固禪が生前に完成させた本とは区別されるものである。したがって、本稿では固禪が生前に作成した稿本・写本や清書本の検討が主体となるが、併せて固禪作成の指図や新たな自筆稿本類の存在などについても指摘を行いたい。

一 『大内裏図考証』の作成契機

元文元年（一七三二）、烏丸光栄の男として誕生した光世は、延享四年（一七五七）、十二歳の時に裏松益光の養子となり、裏松家を相続する。⁽⁸⁾ これ以降順調に官位を重ねるはずであったが、宝暦八年（一七五八）のいわゆる宝暦事件に連座して、出仕を止められることとなり、同十年には落飾して固禪と号した。その後、安永七年（一七九六）に至りようやく出行を許され、また天明八年（一七九七）正月の京都大火（天明の大火）後には参内が叶い、焼失した内裏の一部を復古様式で再建するための寛政度内裏造営において造営御用を仰せら

れた。これは蟄居から参内許可までの約三十年という長期の間に『大内裏図考証』や『皇居年表』等の編修作業を着実に進め、固禪の建築・調度に関する故実研究が朝廷内で大きく評価されていたからにはかならない。

では『大内裏図考証』の作成は、いつ、どのようにして始められたのであろうか。この点に関する従来の研究は、蟄居中に編修が行われたと述べるのみであり、作成開始時期やその契機については殆ど明らかになっていない。しかし、次に引用する『無仏斎手簡集』⁽¹⁰⁾寛政四年(二七三)五月二十日付書状によれば、その事情が明らかとなる。

内裏殿舎之図ヲ別ニ作り考証ヲ著シ候ハ御厨子所預高橋若狭守宗直朝臣ヲ始ニテ、其図及考証世上ニ流布仕候、此図紫宸・清涼二殿ノミノ事ニ而、禁中全体ノ図ニ及不申故、廿七年前、^(固禪)裏松公思召被立候而、大内裏図ヲ、諸図ヲ集メテ諸書ノ説ヲ会メ、改正ノ図廿余年ノ考索ヲ以、今度致成就候、明和八年辛卯ノ冬ヨリ^(藤貞幹)私へ茂裏松公被命候義有之候而、安永二年已来今年ニ至リ御相手ニ相成居申候、

すなわち、固禪は寛政四年から二十六、七年を遡る明和二(二七五)、三年頃に、当時高橋宗直⁽¹¹⁾(二七三、二七五)が著し流布していた紫宸・清涼二殿の図とその考証に触発され、それが禁中全体に及んでいないことから総体的に考証しようと思ひ立ち、編修作業を開始したことが知られる。固禪が三十歳頃のことである。高橋宗直が著した紫宸殿・清涼殿の図面(『清紫両殿図』)の写本は、後述の如く宮内庁書陵部や京都府立総合資料館に所蔵されており、またその考証も『清紫両殿図考証』や『清紫両殿別勘』として伝存している⁽¹²⁾。固禪の先行研究として宗直の業績は看過すべきでなく、その再評価が求められよう。

なお、藤貞幹⁽¹³⁾(二七三、二七五)が固禪の故実研究に多大な役割を果たしたことは有名であるが、そのことは上記の書状からも具体的にうかがうことができ、貞幹は明和八年(二七〇)冬より固禪の研究の補佐を依頼され、実際には安永二年(二七三)以降、『大内裏図考証』を中心に固禪の研究を支えてきたことが知られる。

二 固禪作成の図面類の存在

『大内裏図考証』の編修と併行して固禪が自ら平面図(指図)を作成していたことについてはすでに指摘があるが、その後はあまり注目されていない⁽¹⁴⁾。『蒙斎手簡』⁽¹⁵⁾天明八年(二七六)の書状へ55頁(註2)松尾a論文に付された整理番号を示す。以下同じ)には、

裏松入道様御参内被仰出候ニ付、為御祝御状即日指出申候、(中略)古来有職ノ人多御座候へ共、殿舎研窮之人とても無御座候所、廿年来御考索之図及御考証も此度之火災ニも残り申候而、御用ニ相立候義、仰之通、誠ニ造作不測之事と奉存候、(傍点筆者、以下同様)

とあり、天明八年当時、有職の人でも殿舎を研究する人がいなかったこと(高橋宗直はこの三年前に死去)、そうした中で固禪が考証し作成していた「図」と「御考証」が存在し、共に天明の大火から焼失を免れたことを伝えている。

また、先掲『無仏斎手簡集』五月二十日付書状には、続けて寛政四年時点で固禪が著していた諸図面とその考証の内容が次の如く列記されている(／＼は底本の改行箇所を示す。以下同じ)。

大内裏図	中和院共	一鋪	朝堂院	〔圖 以下同シ〕
豊樂院	〃	〃	武徳殿	〃
東宮坊	〃	〃	太政官	〃
外記序	〃	〃	南所	〃
宮内省	〃	〃	大学寮	〃
真言院	〃	〃	宮城	〃
東西両京	〃	〃	〃	〃

右考証

一上 都城	一下 都城	羅城門附	二宮城	并十二門
三上 朝堂院	三 中同	三 下同	同附録	上中下 大嘗宮
四上 豊樂院	四 下同	〃	五武徳殿	六内裏外郭
七中和院	八蘭林房	〔マヤ〕以下	九内裏内郭	十紫宸殿
十一上 清涼殿	十二後涼殿	已下	十三仁寿殿	以下 十四宜陽殿
十五東軒廊	十六綾綺殿	已下	十七常寧殿	已下 十八五舎
十九神祇官	廿附録	太政官	廿一外記序	廿二侍従所
廿三中務省式部	廿四大学寮	〃	廿五治部	已下 廿六宮内
廿七彈正	已下 廿八左近府	〔マヤ〕以下	廿九神泉苑	以下 三十真言院

この内、計十三鋪の指図については、前章で引用した書状の前段に、此度拝見被仰付候図ハ（中略）裏松公改正殿舎図草稿にて未定之図ニ御座候、此図追々校正にて六年前浄写出来致し候、其後又所々改正之所有候而、此節は最早遺恨有之間敷と申程に出来仕候、

とあり、これより六年前の天明六年（一七六六）頃に、それまで固禪が未定稿ながら作成していた「改正殿舎図草稿」を清書し、その後、所々に改正を加え

て完成させたものに相当することがわかる。高橋宗直の内裏殿舎に関する研究が図と考証で構成されていたように、固禪の『大内裏図考証』も、本来は図と考証とが一体のものとして編修されていたのである。

また書陵部所蔵『尚実公記』（九一五二〇六）天明四年（一七六四）の記録には、

一、広橋書来、先日言上候裏松入道固禪書附候大極殿図相調候間、入御覽、此通ニ而可令献上哉、相伺候者也、（閏正月五日条）

一、広橋申裏松入道所図大極殿之図、差上ケ候也、（同月二十一日条）

一、贈書於広橋、裏松入道所作清涼殿図と勸物、再熟覽了被返却也、

（八月二十七日条）

一、贈書於広橋大納言申示条々、（中略）且先達而裏松入道献上之中殿之勸物之内、御溝水流之事不分明候、（九月十七日条）

などとなり、固禪が作図した「大極殿図」や「清涼殿図」は、「勸物」と共に早くも天明四年の段階から撰政九条尚実に進上する形をとるまでに整備されていたことが知られる。¹⁶天明四年は、固禪が撰政尚実に「皇居年表」正編五冊を献上した年でもあり、すでにこの時期より固禪の内裏殿舎を中心とする指図やその考証は、朝廷内において一定の評価を得ていたものと考えられる。

旧故実叢書本の「大内裏図考証小伝」には「内藤広前（中略）^{〔文政ノ誤リ〕}文化中、尾張侯の為に、大内裏図考証を校訂し、其の誤を正し、足らざるを補ひ、新に全図九巻を製作し、これを添えて以て完璧としたり」とあり（増訂版・新訂増補版では「凡例」に収録）、同叢書では内藤広前が新たに製作した附図が採用され、現在もこの図が主に利用されている。¹⁸そのため、固禪が作成した指図は正当な評価を得ていないが、¹⁹固禪は当初から考証と共に「大内裏図」

以下の図面も作成していたのであり、この点を改めて強調しておきたい。広前は江戸の国学者屋代弘賢（二七五、二八四）から尾張藩にもたらされた『大内裏図考証』五十巻・同別録十巻の写本のみを補正の対象としており、⁽²⁰⁾固禪作成にかかる図面の写本は入手しなかったようである。こうしたことも、固禪の手になる図面がその後注目されない理由となったのであろう。

では、今に伝わる固禪作成の指図（原本もしくは写本）としてはどのようなものがあるか。書陵部所蔵史料の中で確認し得たものを以下に掲げる。

イ 藤岡通夫氏旧蔵本「内裏図」一鋪（五〇九―九七）

当図は藤岡氏も述べるように、筆跡より判断して固禪自筆の草稿図とみられる。⁽²¹⁾内容は内裏図が主体となり、その左側に中和院などが補記されたものである。したがって、この図は先掲十三図中の「大内裏図」中和院共一鋪の内裏部分を作成する基となった草稿図の可能性がある。

ロ 春木文庫本「大内裏図 附大内裏図考証」五十九冊・七鋪（四五―一三）

当本について、西井氏は、「考証」本体五十九冊の書写が文化八年から十一年にかけて行われていることから「この写本に添えられた指図七葉は、写しであるとはいえ、固禪の原図に基づいたものではないか」と推測されている。⁽²²⁾指図七葉の内訳は、①宮城図 一鋪（「内裏図」と外題するが、実際は大内裏図）、②内裏図 一鋪（附中和院、彩色）、③豊樂院図 一鋪（彩色）、④・⑤左京図 二鋪（南・北各一鋪）、⑥・⑦右京図 二鋪（南・北各一鋪）であり、本冊同様いずれも「春木文庫」「内大臣光栄公之孫女」「藤原直子字正姫」「直子」の朱印が捺される。⁽²³⁾これらは西井氏の指摘の如く、内藤広前作成の図面とは内容が異なるものであり、先掲十三図の内容と比べると、①③は合致している。

ハ 沢宣嘉旧蔵本「大内裏図考証」六十六冊・附図四十四折（一七三―九六）⁽²⁴⁾

当本の本冊部分は、固禪死後まもない文化三年（二八六）から同五年頃に書写されたらしいことが指摘されており、⁽²⁵⁾附図の書写も同時期かと思われる。

附図は本来四十五折であったが、現在はNo. 8（附図の通し番号を示す。以下同じ）の一折を欠く。四十四折の中には、「御厨子所預若狭守紀宗直」の識語があるNo. 1清涼殿之図ほか、No. 6真言院図、No. 7外記庁及南所図、No. 10武徳殿図、No. 26太政官図、No. 28宮内省図、No. 34内裏図、No. 37宮城図、No. 39大学寮図、No. 41朝堂院図、「宗直云、……」として高橋宗直の按文が記されたNo. 42紫宸殿及清涼殿図、No. 43豊樂院図、No. 45内裏図附中和院図などが含まれている。この内、No. 1清涼殿之図やNo. 42紫宸殿及清涼殿図は、固禪が作図する際に参考とした高橋宗直作の紫宸殿図や清涼殿図であったとみられるが、No. 6・7・10・26・28・37・39・41・43・45などは、先掲の十三図にほぼ一致する。またNo. 7には「寛政三年仲春改正」という注記もみえるが、これは先掲貞幹書状の「其後又所々改正之所有之候」という内容に附合する。したがって、これらの附図は「大内裏図考証」本冊と併行して固禪が作成した指図の内容を示すものとして貴重であるといえよう。

以上三件の指図はいずれも固禪が作成した平面図の内容を伝えるものとして注目しなければならない。なお、指図ではないが、固禪が作成した絵画史料として「宮室図」の写本が東京国立博物館に蔵されている。これは、「年中行事絵巻」などの絵巻物類から内裏の殿舎・門などを写して類聚したものである。⁽²⁶⁾「宮室図」のような絵画史料は、指図を補うものとして、寛政度内裏造営の現場においても紫宸殿・清涼殿などの殿舎を建築する上で大いに参考にされたものと思われる。前述の高橋宗直著「清紫両殿図考証」ではこう

した絵画史料を紫宸殿と清涼殿とに分けて本冊に収載しているが、固禪はこのような絵画史料を『大内裏図考証』には殆ど載せておらず、そのみを独立させて別にまとめたのである。

しかし、寛政九年（一七九七）朝廷に『大内裏図考証』が献上された際、かかる指図や絵画史料の類は献上されなかった。その直接の理由は図面類までを含めた献上の仰せがなかったからであろうが、すでに紫宸殿・清涼殿などの図面は幾度も提出済みであり、また考証本冊の諸巻には必要に応じてそれぞれ部分図や縮小図が記されていることから、改めて全体図等を献上する必要はなかったであろう。図面類の検討は以上にとどめ、次章以下では『大内裏図考証』本冊の編修について検討を進めていく。

三 『大内裏図考証』稿本類の検討

本章では、『大内裏図考証』の編修過程を考察する前提として、その稿本・写本等について検討を加える。

（一）東京大学史料編纂所所蔵裏松家本

東京大学史料編纂所には、特殊蒐書「裏松家本」が所蔵されている。これは固禪の自筆稿本や自筆書写本を数多く含む史料群であり、昭和二十九年に同所が徳大寺公英氏から購入したものである。⁽²⁸⁾ 総数二百五十件以上に及ぶが、その中核をなすものに裏松家本『大内裏図考証』全八十六冊（仮番号 裏松一―四）がある（以下、これを指して裏松家本と称する）。またこれには、朝廷献上の際に固禪が作成した『大内裏図考証清書目録』一冊（仮番号 裏松五）も附属する（以下『清書目録』と記す）。裏松家本八十六冊の分類・

構成・筆跡等については、すでに西井・吉田・福田三氏の研究⁽²⁹⁾があり、『清書目録』についても吉田・福田両氏が論及されているが、いま一度改めて検討を行いたい。

清書目録 『清書目録』には、まず寛政九年の献上本書写者とその下書本書写者が巻ごとに列記され、さらに献上本の丁数、書写者への挨拶期日なども記されている（図版12―1参照）。同目録について分析を行われた福田氏は、そこに列記された献上本書写者の人名と実際の筆跡とを比較する作業などを経て、寛政九年の献上本を書陵部所蔵の三十巻五十冊本（五五四―二一）と特定されたのである。⁽³⁰⁾ 同目録の記載事項の内、献上本および下書本の書写者を一覧にしたものが表1である。すでに福田氏も同様の表を作成しておられるが、本表では献上本各冊の冒頭に付される冊内目録の筆跡を調べた結果も併記し、また後述する下書本の所蔵先も記号で記入した。表1によれば、下書本の書写は固禪自身が十四冊（内二冊は固禪を含めた四人で分担）と最も多く、その他を十五人に依頼している。一方、献上本の書写は固禪が八冊で、その他の冊を二十八人で分担している。固禪以外の人物は、裏松謙光・明光らの家族および日野家・烏丸家等の親族、また藤貞幹をはじめとする故実研究上の知人などである。

福田氏が『清書目録』にみえる献上本書写者について検討し、献上本を特定された意義は大きいが、下書本の存否には言及されていない。したがって、以下では同目録の下書本書写者に基づく下書本の特定も課題となる。

裏松家本 裏松家本八十六冊は『大内裏図考証』の正編と続編の稿本・写本から成る。この正編と続編の区分は内容上の区分であり、献上本の三十巻五十冊に相当する稿本および写本を正編、それ以外の別録・附録・続大内裏

表1 「消番目録」記載の献上本・下書本書写者

冊次	巻次	巻名	献上本書写者	丁数	筆跡	冊内目録の筆跡	下書本書写者	筆跡	所蔵
1	目録上	目録 上	固禪	55	●	—	固禪	●	×
2	目録中	目録 中	裏松前宰相謙光	54	—	—	固禪	●	×
3	目録下	目録 下	登貞丸	48	—	—	固禪	●	×
4	一上	郡城 左京	萩原右兵衛権佐(從目)	64	—	別筆	平田健麿	—	B
5	一下	郡城 右京	萩原右兵衛権佐(從目)	54	—	同左	虫鹿三河守(為秀)	—	B
6	二上	宮城 上	日野中納言(資相)	38	△	別筆	濱島志摩守等庭	—	B
7	二下	宮城 下	日野侍從資愛	48	△	別筆	濱島志摩守等庭	—	A
8	三上	朝堂院 上	固禪	89	●	同左	固禪・濱島内膳奉膳・平田健麿・松井能登目	◎	A
9	三中	朝堂院 中	烏丸右少弁(資薫)	59	△	別筆	松井能登目(定雄)	—	B
10	三下	朝堂院 下	押小路新大外記(師武)	53	—	同左	山科菟前守(長從)	—	B
11	三附録上	大嘗宮 上	登貞丸	35	—	同左	平田健麿	—	B
12	三附録中	大嘗宮 中	虫鹿治部丞(秀芳)	41	—	同左	出納右近將監(平田職厚)	—	B
13	三附録下	大嘗宮 下	日野侍從(資愛)	59	△	同左	登貞丸	—	B
14	四上	豊樂院 上	北小路右京大夫祥光	41	△	別筆(固禪)	虫鹿三河守(為秀)	—	A
15	四下	豊樂院 下	外山修理權大夫光実	42	—	同左	生島出羽守(成房)	—	B
16	五	武善殿	勘解由小路左京権大夫資善	26	△	同左	虫鹿治部丞(秀芳)	—	A
17	六	外郭	虫鹿三河守(為秀)	78	—	同左	固禪	●	B
18	七	中和院	外山修理權大夫光実	49	—	同左	濱島内膳奉膳(清章)	—	B
19	八	蘭林坊	勘解由小路左京権大夫資善	24	—	同左	裏松勘解由次官明光	—	B
20	九	内郭	坊城中納言(俊規)	60	△	同左	固禪	●	B
21	十上	紫宸殿 上	藤島新藏人(助功)	37	△	同左	藤島貞幹	—	B
22	十下	紫宸殿 下	藤島新藏人(助功)	62	△	同左	固禪	●	B
23	十一上	清涼殿 上	出納右近將監(平田職厚)	65	—	同左	固禪	●	A
24	十一中	清涼殿 中	出納右近將監(平田職厚)	48	—	同左	固禪	●	B
25	十一下	清涼殿 下	尾崎健麿頭(積興)	56	△	別筆(固禪)	固禪	●	A
26	十二上	後涼殿	固禪	46	—	同左	固禪	●	B
27	十二下	射場殿	固禪	37	●	同左	固禪	●	B
28	十三	仁壽殿	勘解由小路左京権大夫資善	63	—	同左	濱島志摩守(等庭)	—	A
29	十四	宣陽殿	石井左京大夫(行宣)	63	△	同左	松井能登目(定雄)	—	A
30	十五上	東軒殿	固禪	44	●	同左	生島出羽守(成房)	—	A
31	十五下	敷政門	固禪	29	●	同左	生島出羽守(成房)	—	B
32	十六	綾綺殿	勘解由小路左京権大夫資善	27	△	同左	藤島貞幹	—	B
33	十七	常寧殿	広橋左大弁宰相(胤定)	72	—	同左	固禪	●	A
34	十八	五香	濱島志摩守等庭	73	—	同左	尾崎健麿頭積興	—	B
35	十九	神祇官	烏丸右少弁(資薫)	69	△	同左	濱島内膳奉膳(清章)	—	B
36	廿上	太政官 上	固禪	33	●	同左	固禪・貞幹・采女正・内膳奉膳	◎	A
37	廿中	太政官 中	押小路新大外記(師武)	35	—	同左	尾崎健麿頭積興	—	A
38	廿下	太政官 下	壬生官務小槻(敬義)	26	—	同左	平田健麿	—	C
39	廿附録	太政官 附録	堀川侍從(俊実)	27	—	同左	登貞丸	—	A
40	廿一	外記序	壬生官務(敬義)	52	△	同左	藤島貞幹	—	A
41	廿二	侍從所	固禪	38	●	同左	高橋采女正(宗孝)	—	Cカ
42	廿三	中務省	錦小路中務大輔(頼理)	63	△	1丁のみ固禪	虫鹿三河守(為秀)	—	A
43	廿四上	大学寮 上	松井能登目(定雄)	38	△	同左	松井能登目(定雄)	—	×
44	廿四下	大学寮 下	藤島貞幹	33	△	別筆(固禪)	松井能登目(定雄)	—	×
45	廿五	治部省	堀川太宰大式(忠順)	54	—	同左	濱島志摩守(等庭)	—	A
46	廿六	宮内省	山科内蔵頭(忠目)	70	—	同左	出納右近將監(平田職厚)	—	A
47	廿七	彈正台	勘解由小路左京権大夫資善	36	—	同左	淡川土佐守(康民)	—	A
48	廿八	左近衛府	北小路右京大夫祥光	42	△	別筆(固禪)	濱島内膳奉膳(清章)	—	C
49	廿九	神泉苑	町中務資直	37	△	同左	尾崎健麿頭積興	—	C
50	卅	真目院	裏松勘解由次官明光	52	—	同左	裏松勘解由次官明光	—	×

註 1) 「筆跡」欄の記号は、●=全部固禪自筆、◎=一部固禪自筆、△=数丁固禪自筆、をを表す。
 2) 「所蔵」欄の記号は下書本の所蔵先を示し、A=東大史料編纂所、B=京都府立総合資料館、C=刈谷市中央図書館、×=所在不明、を表す。
 3) 本表は福田敏明「寛政九年献上の『大内裏因考証』について」(『古代文化』34巻3号 1982年)掲載の表を補訂して作成した。

図考証などと称されるものをまとめて続編と呼ぶことにする。(31) この分類に従えば、全八十六冊は正編に属する稿本・写本六十七冊と続編に属する稿本・写本十九冊とに大別される。そして各冊の形態や記述内容を見てみると、正編・続編を通じて、そこには少なくとも編修過程の異なる三段階があることが確認される(一例として図版12-1-2参照)。この観点から、最近吉田早苗氏は八十六冊を新たに整理され、I・II・IIIの段階区分を行われた。各段階

の特徴を筆者の調査より改めて記すと、
 I 固禪自筆の冊に加え、固禪および藤島貞幹の筆が混在している冊が多い。(32) 筆致はやや荒く、頭注や貼紙による史料の補足が多い。史料に朱で番号を付して順番の指示を行う。項目ごとに余白を設けた箇所が多い。
 II 固禪自筆の冊と他筆の冊がある。貼紙は少なく、余白は殆どなく、編修段階がIより進んでいる。また、Iで校訂・指示された箇所がそれに従って書き改められている部分も確認される。しかし、移動符号など新たな校訂指示も所々にみえる。
 III 固禪自筆の冊と他筆の冊がある。編修段階としては清書本に近い写本で、IIで指示された箇所がそれに従って書き改められている部分もみえる。表紙に寛政九年献上以後の年次を示した校訂注記がある冊もあり、本文中にも朱による校訂が若干存する。

となる。こうした区分に従って八十六冊を分類・整理したものが表2の「裏松家本」I・II・IIIの欄である。なお、正編の第五十七冊・第六十二冊の二冊と続編の第七十三冊の一冊は巻数や巻名も定まっておらず、I以前の編修段階を示すので、表2では0段階として表示した。
 さて、表2によれば、Iは四十二冊(正編二十六冊、続編十六冊)、IIは十八冊(正編のみ)、IIIは二十三冊(正編二十一冊、続編二冊)を数えるが、右に記した

表2 「大内裏図考証」稿本・写本・献上本の分類一覧

巻次	巻名	裏松家本				資料館本			村上文庫本	附録部本 (献上本)	
		0 3冊	I 42冊	II 18冊	III 23冊	I 15冊	II 22冊	III 4冊	5冊	50冊	
正編	目録上					1○				1●	
	目録中					2○				2○	
	目録下					3○				3○	
	一上	都城 左京		1●△			4○ 寛政11.12				4○
	一下	都城 右京		2●△			5○				5○
	二上	宮城 上		3●△			6○				6○
	二下	宮城 下			5○ 寛政10		6●	7●			7○
	三上	朝堂院 上		7●△ 寛政12		8○ 寛政12, 享和2					8●
	三中	朝堂院 中		10●△ 天明5		11●		8○			9○
	三下	朝堂院 下		12●△		13● 享和1		9○			10○
	三附上	大嘗宮 上		14●△ 天明7				10○	11●		11○
	三附中	大嘗宮 中		15●△ 天明7				12○ 享和1	13● 享和1		12○
	三附下	大嘗宮 下		16●△ 天明7				14○ 享和1	15● 享和2		13○
	四上	豊楽院 上		17●△ 天明6	18○				16●		14○
	四下	豊楽院 下		19●△ 天明6		20● 享和2		17○			15○
	五	武徳殿			21○ 享和1.2		18●△				16○
	六	外郭		22●△		23○		19● 寛政9			17○
	七	中和院		24●△		25● 享和3		20○			18○
	八	蘭林坊 以下		26●△		27○ 享和3		21○			19○
	九	内郭		28●△ 天明4		29● 享和3		22●			20○
	十上	紫宸殿 上		30●△		31● 享和3		23○ 享和2			21○
	十下	紫宸殿 下		32●△		33●		24●			22○
	十一上	清涼殿 上			34● 享和3	35●	25●△				23○
	十一中	清涼殿 中		36●△				26●			24○
	十一下	清涼殿 下			37●		27●△				25○
	十二上	後涼殿 以下		38●△ 天明3,4		39● 享和3		28●			26●
	十二下	射場殿 以下		40●△				29●			27●
十三	仁寿殿 以下			41○		30●△ 天明4				28○	
十四	宣陽殿 以下			42○		31●△				29○	
十五上	東軒廊 以下			43○		32●△				30○	
十五下	教政門 以下		44●△ 天明4				33○			31●	
十六	綾綺殿 以下		45●△ 天明4				34○			32○	
十七	常寧殿 以下			46● 寛政10		35●△				33○	
十八	五舎		47●△		48●		36○ 寛政10			34○	
十九	神祇官		49●△		50○		37○ 寛政10			35○	
廿上	太政官 上			51○						36●	
廿中	太政官 中			52○					1●△(I)	37○	
廿下	太政官 下				53○				2○(II)	38○	
廿附	太政官 附			54○						39○	
廿一	外記序			55○						40○	
廿二	侍從所				56○				3○(IIカ)	41●	
-	藏御曹司・春宮坊・梨木院	57●	-	-	-	-	-	-	-	-	
廿三	中務省・式部省			58○		38●△				42○	
廿四上	大学寮 上				59○					43○	
廿四下	大学寮 下		60●△							44○	
廿五	治部省 以下			61○ 寛政9		39●△				45○	
-	宮内省	62●	-	-	-	-	-	-	-	-	
廿六	宮内省 以下			63○		40●△				46○	
廿七	彈正台 以下			64○		41●△				47○	
廿八	左近衛府 以下				65○				4○(II)	48○	
廿九	神皇苑 以下				66○				5○(II)	49○	
卅	真行院		67○							50○	
続編	別録		中和院御案東	68●△							
	甲		紫宸殿附録	69●△							
	乙		清涼殿附録	70●△							
	丙		清涼殿附録	71●△							
	全		温明殿附録	72●△							
	一		大学寮別録	73●							
	附録		屏風 天	74●							
	附録		屏風 地	75●							
	附録		斗帳(御帳)	76●							
	附録		里内裏	77●△							
	続・附録		摂関已下第一	78●		79○					
	続・附録		摂関已下第二	80●		81○					
	別録		題額	82●							
	附録		障子	83●							
	附録		雜々	84●							
	続		雜事	85●							
	続		雜事附録	86●							

注1) 諸本ごとの番号は母次を表す(資料館本には母次がないが、便宜上筆者が新たに付した)。
 2) 母次横の記号は、●=因禪自筆本(△付は徳貞翁の筆跡を含む)、◎=因禪自筆と他筆の混じる本、○=他筆の写本、を表す。
 3) 村上文庫本の各冊の編修段階は()の中に示した。
 4) 校訂注記等で年次がわかるものについては適宜記入した。年次の注記は平支のみの場合でも年号に改めた。
 5) 裏松家本の第67冊(巻三十)は、1段階の稿本に対し、安政四年頃に裏松基光が、裏松明光筆の下書本・献上本の書き損じの紙を重ね、さらに竹屋本により校訂を加えたものである。
 6) 裏松家本の第53、56、59、65、66、79、81冊の外題は裏松基光の筆にかかると、本文は別筆である。
 7) 福田敏則「裏松因禪自筆の『大内裏図考証』について」(『日本建築学会東海支部研究報告』19号 1981年)および吉田早苗「『大内裏図考証』の稿本について」(『日本歴史』397号 1981年)を参照して作成した。

各段階の特徴から、Iは第一次稿本、IIはその次の段階の稿本、IIIは献上以後の写本と考えられる。³³⁾そして、この中でIIの諸巻の筆跡に注目すると、それぞれが「清書目録」下書本書写者の筆跡に一致した。筆跡の確認は、献上本に見える同一人物の筆跡と照合する方法をとった。例えば、「清書目録」に拠ると献上本の目録上・巻三上・十二上・同下・十五上・同下・二十上・二十二は因禪が自ら書写しているが、これらの筆跡と、「清書目録」下書本

書写者で因禪書写とする巻十一上・同下・十七とを比べると、裏松家本IIの三巻とも因禪の筆跡と認められる(図版11-1・2参照)。また献上本巻十は濱島志摩守等庭の書写にかかるが、この筆跡を同じく等庭が書写したとされる下書本巻二下・十三・二十五と比べると、やはり裏松家本IIの三巻において同筆であることが確認され、他も同様の結果が得られた(献上本巻六と裏松家本II巻四上へ共に虫鹿三河守)、献上本巻二十四上と裏松家本II巻

十四へ共に松井能登目」など。したがって、II段階の十八冊は献上本の直接の前提となった下書本の一部と判断される。⁽³⁴⁾しかし、裏松家本における下書本にはなお欠巻が多いが、その多くを埋めるものが次に述べる京都府立総合資料館所蔵本である。

(二) 京都府立総合資料館所蔵本

京都府立総合資料館には、「大内裏図考証」五十六冊・八鋪(B特二八八・四五―D一五)として整理される一連の史料がある。この内訳は次の通りである。⁽³⁵⁾

- a 大内裏図・大内裏大図原稿・往古京之図(右) 計 三鋪
- b 大内裏図考証(二十七巻) 計 四十一冊
- c 大内裏図考証(二十巻) 計 十四冊
- d 太政官庁図考証 附太政官図・新修太政官図 計一冊・二鋪
- e 清紫兩殿図・清涼殿之図・諸寮所之図 計 三鋪

この内、d・eの考証や図面には、先述した高橋宗直の作成によるものが含まれている。またa・eに加え、「大内裏図考証 附属書/現在数目録并ニ類書。大小の図。目録」と題した全体の目録が一冊添付されている。

これらについては従来の研究で全く言及されていないが、調査を行ったところ、この中のb四十一冊本「大内裏図考証」が、固禪の自筆本を含む稿本類に相当することが判明した(以下、この四十一冊本を資料館本と称する)。資料館本の内容は正編の諸巻に相当する稿本・写本のみで、続編に属するものはない。その巻を列記すると、目録上・中・下、一上・下、二上・下、三上・下(以上各一冊)、三附録上・中・下(以上各二冊)、四上・下、五上・下(以上各一冊)、二十五―二十七(以上各一冊)、となる。巻数としてはほぼ一

連のものが揃っているが、前半部では巻二上が欠け、後半部では巻二十上―二十二、二十四上・下、二十八―三十が欠けている。したがって、現在の員数は都合四十一冊であるが、巻七に「大内裏図考証/四十六冊 特902」と記した紙片が挟まれていることから、もとは五冊ほど多く四十六冊であったとみられる。また各冊の表紙見返等に「京都府立図書館印」の蔵書印(朱印)が捺されている。

現存の四十一冊には固禪自筆本と他筆の写本が混在しているが、裏松家本と同様、資料館本にも編修段階として少なくとも三段階が確認されるので、同じく表2において「資料館本」I・II・IIIの欄に分類して表示した。これによれば、Iは十五冊、IIは二十二冊、IIIは四冊となる。そして資料館本II段階の二十二冊も、裏松家本と同じく「清書目録」下書本書写者の筆跡に一致した(筆跡照合の方法は裏松家本と同様)。一例として、藤貞幹の書写になる献上本巻二十四下と資料館本巻十上の同筆関係を挙げておこう(図版11―13・4参照)。また資料館本にあるIIの各冊は、いずれも裏松家本のIIに欠けているものに相当する。これらから、資料館本II段階の二十二冊も下書本そのものと認定されるのである。⁽³⁶⁾そうすると「清書目録」に記す「大内裏図考証」の下書本は大きく裏松家本と資料館本とに二分されて存在していることになるが、その観点から改めて表2のIとIIIも両本を対照してみると、I・IIIにおいても資料館本には裏松家本に欠けている冊が多く存することが判明する。

以上のことから、裏松家本と資料館本は本来一具であったが、固禪没後のある時期に、裏松家本から正編のI・II・III各段階の本がほぼ一揃い取り合わされて他家に移されたと想定しうる(それが資料館本として伝存)。その時

期や経緯についての詳細は不明であるが、以下の二点は留意すべきであろう。

第一点は、裏松家本の広橋家預け置きと返却についてである。「隆光卿記」文政十二年（一八元）六月三日条には、「日野前大納言書状続之」として日野資愛から届いた六月二日付の書状を載せ、これに続けてさらに、

再白、先日ハ裏松家書物之事御丁寧御示、家父（日野資矩）へも申聞候、御心切本人（アキマ） 事と存候、其節任仰不捧御答候、当拜顔可申述候也、

此返書之事、裏松固禪入道卒去之砌、故儀同、（伊光）入道存生中称契約、

且故前宰相明光卿為愚痴人、且若年旁所預リ置之旨申立、長持共抑留、理不審開封令書写、明光卿五十以後尚不返与、今度恭光一位為相妹之間、漸所返与云々、

と記している。これから、桜井秀氏は、固禪没後にその関係史料は広橋家に保管され、文政年間に至ってようやく裏松家に返却されたこと、また世に流布する固禪の著作は多く広橋家により作成された複本であることを指摘された。³⁸この史料に加えて、資料館本に附属する図面類の内、先掲のa「大内裏大図原稿」（一鋪）の裏書に「本図ハ図考証ル添見ル／旧広橋家蔵」といふ記載もあることからすれば、「大内裏図考証」の稿本類も他の多くの裏松家本と共に、固禪没後に一旦広橋家へ預け置かれたと考えられよう。

そして「隆光卿記」によれば、固禪の死の間際、広橋伊光が裏松家本を広橋家で預かることを固禪との生前契約として取り交わしていたらしいこと、また裏松家の嗣子明光が不肖であったことから、裏松家本を一括して広橋家が預かり、長持ごと抑留して開封・書写したこと、³⁹さらに明光が五十歳以後になっても裏松家へは返却されず、この年（文政十二年）に至り、ようやく同家に返納されたいことが知られる。

第二点は、資料館本と日野家との関係である。資料館本四十一冊には、日野資矩が書写したc十四冊本『大内裏図考証』（文政五年・同六年書写）が付随して伝存していることから、資料館本はある時期以後、日野家に伝来した可能性が高いと考えられよう。日野資矩は固禪の甥に当たり（資矩の父資枝が固禪の実弟）、献上本巻二上の清書も行っている人物である（表1参照）。また京都府立総合資料館には資矩の自筆日記『曆記』四巻（特五五二―一六）や資矩等の書写奥書を持つ『人車記』二十八冊（特九二七―三八）など日野家旧蔵史料も蔵されているので、京都府立図書館（総合資料館引継以前の所蔵機関）の時代に、これら日野家旧蔵史料が順次まとまって入ったものと推測される。

以上の二点から、資料館本の伝来については一応次のように考えられる。

裏松家 ↓ 広橋家 ↓ 裏松家 ↓ 日野家 ↓ 京都府

但し「日野家 ↓ 京都府」の部分は、直接かどうかは明らかでなく、この間に古書店等が入る可能性もあろう。

（三）刈谷市中央図書館所蔵村上文庫本

刈谷市中央図書館所蔵村上文庫本『大内裏図考証』（三三八八）（以下、村上文庫本と称する）には、正編巻二十中、二十下、二十二、二十八、二十九の五巻（五冊）が存在する。現在の装訂は、巻二十中・二十下の二巻（二冊）を一冊に、巻二十二・二十八・二十九の三巻（三冊）を一冊にそれぞれ合冊し、二冊本となっている。村上文庫本については福田氏の紹介があり、⁴¹巻二十中は固禪自筆草稿本、巻二十下・二十二・二十八・二十九は他筆の写本であること、現装二冊の題簽は旧蔵者村上忠順の筆にかかることが指摘されている。この内、巻二十中は裏松家本や資料館本のI段階に相当する本で

あり、巻二十下・二十八・二十九の書写の筆跡は、『清書目録』下書本書写者に記す「平田縫殿」「濱島内膳奉膳」「尾崎縫殿頭積興」のそれと同筆と認められることから、この三冊はII段階の下書本の一部に当たるものと考えられる。残る巻二十二の一冊は筆跡が前半と後半に分かれ、後半は巻二十八を書写した「濱島内膳奉膳」と同筆であるが、前半は『清書目録』下書本書写者として記す「高橋采女正」の筆跡と思われるので（裏松家本巻二十上の一部を高橋采女正宗孝が書写しており、これと比較して同筆と認められる）、本冊も一応下書本と考えておく。この村上文庫本についても表2に併記しているので参照されたい。

何故この五巻（五冊）が刈谷藩医村上忠順の手許に入ったかは不明であるが、I段階の稿本やII段階の下書本に相当することから、当本は裏松家本もしくは資料館本のいずれかから流出したものと推測される。⁽⁴²⁾

以上、本章では京都府立総合資料館に所蔵される『大内裏図考証』の稿本類の存在を新たに指摘すると共に、その第一次稿本（I）や『清書目録』に記す下書本（II）が裏松家本・資料館本・村上文庫本の三者に分かれ、また献上以後の写本（III）とみられるものが裏松家本・資料館本の二者に分かれつつもほぼ伝存することを明らかにした。しかし、表2を見てもわかるように、この三者を合わせても、なお各段階の本には欠失の巻が存するので、今後も引き続き諸本を調査する必要がある。⁽⁴³⁾

四 『大内裏図考証』の編修過程

本章では、前章で指摘した『大内裏図考証』の三段階（I、II、III）の稿

本類に書陵部所蔵献上本を加えて、本書の編修過程を再構成する。

第一次稿本の作成 第一次稿本の作成については、裏松家本・資料館本の正編I段階の諸巻裏表紙に記された注記より、天明三、四年から同七年頃までの期間にその作業をほぼ終えたものとみられる。先述のように、『皇居年表』正編の献上が天明四年であったことから、時期的にみて『皇居年表』献上を終えた後に『大内裏図考証』の作成が本格化したと考えられる。但し、第一次稿本作成の前提作業たる史料蒐集や構成案作成などの問題については現在のところ十分には明らかにできておらず、今後の課題としたい。⁽⁴⁴⁾

ところで、第一次稿本の作成について考える際に問題となるのは、同じ時期に裏松家本続編の0段階およびI段階の諸巻（0段階が一冊、I段階が十六冊）も作成されていたかどうかである。続編の稿本の表紙・裏表紙には作成や校訂に関する年次注記などが記されていないが、以下の諸点より、正編とほぼ同時期に作成されていたと考えられる。

I 献上本の巻二十四下（大学寮下）末尾に「弘文院録別」と記すが、正編にはこの別録が存在しない。⁽⁴⁵⁾

ロ 続編の「温明殿附録」の冒頭には、「献本作別録」という貼紙がある（正編の巻十六末尾には「賢所録別」と朱書され、これと対応している）。

ハ 静嘉堂文庫所蔵「入道固禪注進 勘物」二冊（五三七—三〇）は清涼殿・紫宸殿などの鋪設・調度につき固禪の勘物をまとめたもので、続編の「清涼殿附録」や「紫宸殿附録」と内容が部分的に類似するが、当本の下巻には寛政二年（二七〇）の書写奥書がある。

ニ 続編の「中和院御装束」表紙には「七之下」と墨書し、その上に貼紙で「別録」と書き改めており、正編巻七の表紙も「七之上」と墨書したあと

に、「之上」の二字を朱で抹消している。

ホ 続編の「里内裏」には「閑院殿」の項目の中に「経光卿記天明八、五、七

有子細一見之次、書抜了」などと記された押紙が存する。

右の諸点の内、イ・ロから少なくとも寛政九年の献上時には「大学寮別録」「温明殿附録」が存在したことが指摘できる。またハからは続編の内「紫宸殿附録」「清涼殿附録」の成立が寛政二年以前まで遡るものと考えられる。そしてさらに、ニ・ホより続編の「中和院御装束」「里内裏」は正編作成と同時期に編修されたと考えられよう。これらから、裏松家本続編0段階・I段階の計十七冊も、天明年間には作成を終えていたものと推測される。

下書本の作成 天明末年までに第一次稿本作成をほぼ終えてはいたが、天明の大火とそれに続く復古内裏造営事業の開始により、寛政年間前半期、固禪は造内裏御用・遷幸御用などで多忙を極めた。⁽⁴⁶⁾ またそれと同じ頃、藤貞幹を通じて「大日本史」や「礼儀彙纂」の校閲も依頼されており、さらに寛政六年（二七五）初め頃までは欣子内親王の立后儀御用なども務めていた。⁽⁴⁸⁾ したがって、天明八年より寛政六年初頭までの実質約六年間、固禪は「大内裏図考証」の校訂・清書に従事する時間を殆ど取れなかったものと考えられる。そして、こうした朝廷の御用が一段落ついた寛政六年五月に至り、「大内裏図考証」献上の仰せが出された（「清書目録」）。これにより、献上に向けた下書本の作成が開始されたのである。この時の様子を記す「蒙斎手簡」寛政六年五月の書状へ⁽⁴⁹⁾には、

（裏松固禪）
入道様大内裏図考証全五十冊、一昨日官庫へ可被納候間、御献可有之旨被蒙仰候、三十年來之御苦勞、右之通相成、私共大慶仕候、新写出来次第御献上之御つもりニ御座候、右御献納相済申候ハ、三四部斗方角を

隔候而、藏置候様ニ被成度旨被仰候、

とあり、ここからも同年の五月に献上の仰せを蒙ったことが知られ、献上後は写本を三、四部ほど作成し、方角を隔てて藏し置く意向であったことがわかる。また、この書簡に「全五十冊」と記されているように、この段階ですでに献上本には続編の諸巻は含めないで、正編三十巻五十冊（目録三冊を含む）とすることが固まっていたとみられる。

実際の下書本作成は、まず「清書目録」下書本書写者に記すように固禪自身を含めて十六名で分担し、直接には第一次稿本に施された校訂に基づいて書写が行われた。そして書写が終了すると、下書本にはさらに校訂が加えられた。この点については、例えば、資料館本の巻六（No.19 II）へNo.は表2の冊次を示し、IIは二段階を示す。以下同様。表紙に「巳三月／四日校」と朱書で注記されている。「巳三月」は丁巳年即寛政九年三月に当たり、この注記は献上以前のものとなる。また資料館本の巻三附録中（No.12 II）の表紙には「閏七、廿四校了」とみえ、さらに裏松家本の巻二十五（No.61 II）表紙の右端にも「一校了／●閏七、廿四校了」「志摩守」と朱書される。両本の「閏七」の注記は、寛政九年閏七月に相当するので、この校訂は献上の約四ヶ月前に終了したことになる。裏松家本巻二十五の「志摩守」の注記は、この下書本書写を担当した濱島志摩守等庭を示したものであろう。⁽⁴⁹⁾ このような書写と校訂を経て下書本が出来上がった。前章で述べたように、下書本で現存するものは、裏松家本・資料館本・村上文庫本のII段階の各冊である。

献上本の作成 献上本の作成は、「清書目録」献上本書写者の如く固禪を含め二十九名で分担し、校訂を終えた下書本に基づいて清書が行われた。分担人数が下書本の時よりも増えているのは、それだけ時間的余裕がなかった

ためと思われる。清書終了時期は各冊(各人)により異なったであろうが、巻二十四下を清書した藤貞幹が寛政九年八月十九日に死去(六十六歳)していることから、この巻はそれ以前に清書を終えていたことはいうまでもないが、他の巻も翌九月ないし十月までにはほぼ清書を終えていたものと思われる。

ところで、献上本には他者に書写を依頼した冊においても、冊内目録や本文中に固禪の筆跡が所々見出される(表1参照)。特に、本文中に固禪の筆跡が確認できる部分はいずれも丁単位で存在することが注目されるが、これは、他者が一旦清書を終えた後に固禪が確認を行い、自ら清書し直した丁を差し替えた結果と推測される。また「清書目録」の「献上書写丁数」の項には、行間に「十月廿九日改書一枚、卅日来済」(目録中)などの注記が十八冊分に見え、固禪の差し替えとは別に、書写分担者による部分的な書き直しが行われたこともわかる。その期間は寛政九年十月二十日から十一月三十日までである⁽⁵⁰⁾。さらに、十一月二十九日には「表紙」が、翌十二月四日には「草紙形」と「唐櫃」がそれぞれ出来している(「清書目録」)。そして、この年の十二月十日、ようやく朝廷に献上本を納める日をむかえた。献上の仰せが出されてから約三年半後のことである。

現在、宮内庁書陵部に蔵される献上本は、縦二八・七cm、横二二・六cmの袋綴冊子本で、表紙には外題がなく、また識語や奥書も記されていない。巻十一中には、表紙の次に、折紙に記した全体の内容目録が合綴されている。なお、献上に備えて調達された唐櫃も書陵部に現存するが、今は別置されている⁽⁵¹⁾。

献上以後の校訂と新写本 寛政九年末の献上の後、固禪は手許に残った第一次稿本や下書本などに再び校訂を加え、新たな写本の作成に着手した。裏

松家本と資料館本の表紙に記された校訂注記の内、年次がわかるもののみを列記すると次の如くである。

〔裏松家本の注記〕「 」は墨書、「 」は朱書を表す)

・巻二下 「寛政十年 十月十九日□考□□」(No. 5 II)

・巻三上 「○校了/寛政十二、二月九日再校済」(No. 7 I)

・巻三上 「寛政十二年申二月九日再校畢」『享和二年十二月十四日新写校

考畢」(No. 8 II)

・巻三上 「享和二年壬戌十二月十四日校考了 紀宗孝」(No. 9 III)

・巻三下 「享和元^(西)年 四月廿四日校交畢」(No. 13 III)

・巻四下 「享和二戌年六月十九日校考済 墨付三十九葉」(No. 20 III)

・巻五 「一四八月廿四日/校考相済可清書済/可校考」『^(享和元年)壬戌八月十四日

清、校考済」(No. 21 II)

・巻七 「享和三癸亥四月九日校考済」(No. 25 III)

・巻八 「享和三年癸亥四月十四日校考終」(No. 27 III)

・巻九 「享和三年癸亥六月□□校考済」(No. 29 III)

・巻十上 「^(享和三年)癸亥六月十九日校考済」(No. 31 III)

・巻十一上 「^(享和三年)癸亥三月十四日校考済、目録□清書スム本 清書スベシ」

(No. 34 II)

・巻十二上 「享和三年癸亥七月九日校考終 黒付四十三葉」(No. 39 III)

・巻十七 「^(寛政十年)二年二月廿三日考訂□」(No. 46 II)

〔資料館本の注記〕(同前)

・巻一上 「寛政十一年未十月十四日校考相済可清書/寛政十二年申三月十

九日清書校考済」(No. 4 II)

・卷三附録中『享和元年酉九月四日／御清書済にて校考済』（No.12 II）

・同重複本『享和元年酉九月四日校考終』（No.13 III）

・卷三附録下「西四月十四日／校考済可清書済／可校考」（No.14 II）

・同重複本「享和二年戊二月廿九日校考済」（No.15 III）

・卷十上「壬戌五月廿九日校考済可清書」（No.23 II）

・卷十八「午二月廿九日校考済」（No.36 II）

・卷十九「午四月四日校訂終」（No.37 II）

これらの注記を総合すると、固禪は献上翌年の寛政十年（一七九八）から死去前年の享和三年（一八〇三）まで正編の諸巻に対して校訂を行い、この校訂がなされた下書本に基づいて新たな写本を作成していったこと、またその新写本に対しても再度校訂を行ったことが判明する。例えば、裏松家本卷三上についてみると、No.8（II）に「寛政十二年申二月九日再校畢」「享和二年十二月十四日新写校考畢」、No.9（III）に「享和二年壬戌十二月十四日校考了紀宗孝」との注記があり、これらから、まず寛政十二年二月に卷三上の下書本（No.8）に対して校訂を行い、それに基づいて同巻の新写本を作成したと（これがNo.9であろう）、そして享和二年十二月には、その新たな写本に対して再び校訂を加えたことがうかがえる（この校訂は高橋宗孝による）。No.8『享和二年十二月十四日新写校考畢』の注記はそれと同時に追記されたものであろう。また、II段階下書本の注記の内、裏松家本の卷五（No.21）に「西四月廿四日／校考相済可清書済／可校考」とあり、資料館本の卷三附録下（No.14）に「西四月十四日／校考済可清書済／可校考」とあるものは、共に下書本に対し、享和元年に一旦校訂が済んで「可清書」と記し、その後、清書（新写）を行った際に「可」の文字を抹消して、「済／可校考」と追記

した痕跡が確認できる。

このような献上後の校訂と書写を経て作成された新たな写本は、先掲表2の「裏松家本」「資料館本」欄のIIIに表示したものである。しかし、新たな写本といっても、右に列記した注記によればIII段階の諸巻にも校訂が加えられているので、固禪はさらにもう一度浄書を行う予定であったことが想定されるが、固禪存命中には、もはやそうした本は残されていない。また表2のIIIを通覧すると、卷十八までは固禪自筆本が多いのに比べ、卷十九以下は他者によって書写されていることがわかる。これは文化元年（一八〇四）に固禪が死去したため、卷十九以下の新写が他者に引き継がれた結果と推測される。ともあれ、裏松家本および資料館本のIII段階の本は、寛政九年の献上以後さらに校訂をうけて書写されたものであることから、史料引用の厳密性という点では献上本にまさるものといえよう。

なお統編については、固禪が自らの校訂をどこまでなし得たかは不明である（史料蒐集は行ったが未綴じであったものを、後年、息子恭光がまとめた卷へ裏松家本No.84・86も存する）。また全体の構成に関しても、献上本には入れなかった統編の一部を正編に編入する意志が固禪にあったかどうかについては明らかでない。後者の点については、『大内裏図考証』の統編の一部を正編に含んだ写本の検討を行い、統編がどの時点で組み込まれ、書写されていたのかを跡付ける必要がある。統編数巻を正編に組み込んだ写本として書陵部所蔵沢宣嘉旧蔵本・春木文庫本、古代学協会所蔵松平本、静嘉堂文庫所蔵引馬文庫旧蔵本などが挙げられるが、これらはすべて固禪没後に書写されたものであり、文化初年の書写とみられる沢宣嘉旧蔵本において、早くも「中和院御装束」「紫宸殿附録」「清涼殿附録」「温明殿附録」が正編に

編入されており、以後この系統の写本が増えていったようである。また内藤広前補正本から故実叢書本までの成立経緯についても改めて検討しなければならぬであろう。故実叢書本は広前の補正本に基づいているが、広前が校訂を加えた写本（蓬左文庫本）⁵²は、続編が正編には編入されておらず、正編においては献上本の系統に属する。したがって、続編諸巻の一部を正編に組み入れた形態は、故実叢書本の編者が、献上本系統の写本ではなく、続編の一部を正編に入れた沢宣嘉旧蔵本や春本文庫本などの系統の写本を参考にしたものであろう。⁵³

五 固禪の著作と公家社会

最後に、当該期の公家社会において、『大内裏図考証』をはじめとする固禪の著作がいかなる役割を果たしたかについてまとめておきたい。固禪の数多い著作（末尾の一覧表参照）を作成目的から分類してみると次のようになろう。

（イ）歴史研究および故実研究そのもの目的から作成された著作
（ロ）朝廷の臨時公事御用としての必要性から作成された著作

まず（イ）には、本稿で取り上げた『大内裏図考証』（図面を含む）ほか、『皇居年表』『院宮及私第図』などが該当するであろう。これらが公家社会に与えた影響をみると、特に天明の大火によって焼失した内裏を造営する際に『大内裏図考証』の稿本や殿舎の指図等が存在したことは、光格天皇以下朝廷が幕府に対して紫宸殿・清涼殿などを復古様式で再建する要求を強く押し出すことができた最大の要因となった。また、後の天保年間において、

『大内裏図考証』は公家の会談用テキストとしても採用されており、公卿らが朝儀に関する教養を身につける上での重要史料と考えられていたことがわかる。⁵⁴さらに『院宮及私第図』については、部分的な指図の写しが故実家松岡辰方（一七六〇～一八四〇）より沢田名垂（一七五五～一八四五）に伝えられたことから沢田著『家屋雑考』を生み、いわゆる寝殿造の研究が本格的に開始されたが、その端緒を切り開いたのは、固禪のこの著作であった。⁵⁵これに関連して、固禪は近衛家や桂宮家の要請に応じ、公家邸宅の寝殿を復古様式で計画・建築する際にも考証を行っているが、⁵⁷そこでも『院宮及私第図』や『大内裏図考証』続編の「撰関以下第」「里内裏」などが考証の基礎になっていたものと思われる。

一方、（ロ）については、まず造内裏御用関係として『宮室図』『入道固禪注進勅物』『銭形屏風勅物』『額事』などが著された。これらは『大内裏図考証』と共に寛政度復古内裏造営の遂行を支えるものであった。次に遷幸御用関係として『遷宮雑事抄』『新造内裏遷幸次第』『遷幸之後御手水次第』などが作成された。天皇の行幸は、慶安年間以来、幕府によって事実上停止されてきたが、寛政度における仮内裏（聖護院）から新造内裏への遷幸を威儀をもって実現ならしめた背景には、固禪によるこれらの考証・著作があった。さらに固禪は立后儀等の御用も仰せられた。そしてこの関係から『入内雑事抄』『立后雑事抄』⁵⁹『立后日大床子御膳次第』『裏松固禪勅物』『御産記』⁶⁰などが次々と編修されたのである。これらは光格天皇の皇后となる欣子内親王の入内および立后等の儀式、またその御産に関する諸儀に資するためであったと考えられる。

右記（イ）および（ロ）は、作成目的からみれば異なる性格を有するが、当時

の公家社会における臨時事業や臨時儀式等の遂行を史料考証の面から支えた点では共通する。このような固禪の著作は、江戸後期から末期における朝儀再興の流れにおいて、一つの学問的基盤を形成したと評価できるであろう。

おわりに

本稿では『大内裏図考証』の編修過程を中心として、固禪の著作活動の一端を辿ってきた。各章で明らかにした要点は以下の如くである。

一、『大内裏図考証』作成の前提には高橋宗直の紫宸殿・清涼殿を中心とした殿舎研究が存在した。固禪はそれを宮城全体、さらには京城にまで拡大させて総体的な編修を行ったのである。その開始時期は塾居から約七年を経た明和二、三年頃と考えられる。

二、『大内裏図考証』については、考証部分の本冊のみが目注されがちであるが、固禪は内裏図以下多くの図面（指図）も作成しており、本来は図面と考証とが一体となって編修されたのである。図面は寛政度の復古内裏造営に際して重用された反面、『大内裏図考証』献上時には献上されなかったことから、その後、過小評価されるようになったが、内裏図以下少なくとも十三種の指図が固禪によって作成されていた。

三、『大内裏図考証』本冊の稿本類として、従来知られていた裏松家本・村上文庫本に加え、新たに京都府立総合資料館本の存在が明らかとなった。これらには第一次稿本・下書本・献上以後の新写本が含まれており、特に資料館本は裏松家本の欠を多く補うことから、本来は一具であったが、固禪没後のある時期に裏松家本から分かれたものと考えられる。

四、正編の第一次稿本は天明年間までにほぼ作成されていたが、その後寛政六年頃まで、固禪は造内裏御用・遷幸御用・立后儀御用などに従事して多忙であったことから、下書本・献上本の作成は同年に献上の仰せを受けて本格的に開始された。寛政九年末には献上本が完成し、朝廷への献上が実現するが、固禪はこれ以後も、死の直前まで正編諸巻に対して校訂を続け、新たな写本を残している。一方、続編の稿本も正編と同じく天明年間頃から存在していたと考えられるが、献上以後、続編に対する固禪自らの校訂や正編への編入の形跡などはうかがうことができない。

五、固禪の著作には、故実研究本来の目的から作成されたもの（『大内裏図考証』『皇居年表』等）と、朝廷の臨時公事御用としての要請から作成されたもの（『遷宮雑事抄』『立后雑事抄』等）とが存するが、共に朝廷の臨時事業や臨時公事等を実現する上での学問的基盤を形成し、これ以降の公家社会における朝儀再興の潮流の中で大きな役割を果たした。

なお今後に残された課題としては、まず固禪の他の著作の検討、例えば『院宮及私第図』や『宮室図』などの諸本調査を詳細に行い、『大内裏図考証』編修との関係などを総合的に考察することが挙げられる。また固禪の編修作業における基幹部分ともいえるべき史料蒐集の実態を具体的にすることも重要であろう。そして何よりも『大内裏図考証』の内容そのものを逐一再検討しなければならぬが、かつて内藤広前の補正作業が十数年に及んだように、これには膨大な時間と労力を要する。かく固禪が為し遂げた故実研究の壁は厚いが、少しずつでも、その内容を検証し発展させる努力は必要であろう。

註

- (1) 主な研究を挙げると、大川茂雄・南茂樹「国学者伝記集成」(大日本図書株式会社、一九〇四年)、桜井秀「裏松光世とその著作」上・下(「歴史地理」二八巻四号、二九巻六号、一九一六・一七年)、西井芳子「裏松固禪とその業績」(「平安博物館研究紀要」二号、一九七一年)などがある。
- (2) 松尾芳樹 a 「藤原貞幹書簡抄『蒙齋手簡』」上・下(「京都市立芸術大学美術学部研究紀要」三七号・三八号、一九九三・九四年)、同 b 「書簡の中の藤原貞幹と裏松固禪」(「藤原貞幹〔追悼号〕」藤原貞幹友の会、一九九六年)、伴瀬明美「東京大学史料編纂所所蔵『集』について」(「東京大学史料編纂所研究紀要」一二号、二〇〇二年)。
- (3) 藤岡通夫「寛政御造営の内裏」(同「京都御所」二編十章、彰国社、一九五六年)、斎藤英俊「京都御所と仙洞御所」(「日本美術全集19 近世宮廷の美術」学習研究社、一九七九年)、平井聖編「中井家文書の研究 七」(中央公論美術出版、一九八二年)、藤岡通夫「京都御所―伝統と実用のはざま」(「毎日グラフ別冊 京都御所」毎日新聞社、一九八四年)、島田武彦「近世復古清涼殿の研究」(思文閣出版、一九八七年)などがあり、近年の研究では、松尾芳樹「寛政御造営における清涼殿障壁画について」(「土佐派絵画資料目録」(三)内裏造営粉本」一九九二年)、西和夫「寛政内裏造営と障壁画」(同「建築史研究の新視点」第三編第一章、中央公論美術出版、一九九九年、初出一九九三年)、小沢朝江「復古」という流行―寛政期の公家邸宅造営と復古内裏の影響―(西和夫編「建築史の回り舞台」彰国社、一九九九年)などがある。
- (4) 註(1) 桜井・西井論文。
- (5) 石村貞吉 a 「大内裏図考証と大内裏図」(「史論」六号、一九五八年)、同 b 「二つの書簡」(「史論」七号、一九五九年)、西井芳子「裏松固禪の自筆遺稿―主として大内裏図考証と皇居年表について―」(「古代文化」二〇巻四号、一九六八年)、吉田早苗「大内裏図考証」の稿本について(「日本歴史」三九

- 七号、一九八一年)、福田敏朗 a 「裏松固禪自筆の『大内裏図考証』について」(「日本建築学会東海支部研究報告」一九号、一九八一年)、同 b 「寛政九年献上の『大内裏図考証』について」(「古代文化」三四巻三号、一九八二年)、同 c 「大内裏図考証」の成立について―裏松固禪の製作と内藤広前の補正―(「京都府埋蔵文化財論集」一、一九八七年)。
- (6) 固禪の著作の概要を把握するため「固禪著作一覧表」を作成し末尾に掲載した。著作件数は約五十件ほど存し、内容的には内裏・邸第に関する建築・調度の考証を主とする。なお、国立国会図書館所蔵「書事抜萃」一冊(函号「二七―二五三」、以下、本文・註共に「」内は函号・請求番号等を示す)は、同館の目録や「国書総目録」では裏松固禪著とするが、実際は桂宮家諸大夫尾崎積興(七宅一八三)の著作であり、これを固禪が寛政十年(七九)に自ら書写したものである。また国立公文書館所蔵「諸家亭宅寝殿考証」七冊(一八四―一五二)も、「内閣文庫国書分類目録」(昭和五十年改訂版)では著者を「裏松光世」とするが、本文中に「皇居年表」を引用した後に「私案・・・」とあることから疑問である。
- (7) 「大内裏図考証」が初めて刊行されたのは、今泉定介編の故実叢書においてであり、明治三十四年(六二)から翌年にかけて、和装本十四冊として発行された。ついで、昭和初年に増訂故実叢書が刊行され、「大内裏図考証」には数巻(巻七附録、附録里内裏、同撰関第、同調度)の追加増補がなされた。また昭和二十六年から翌年にかけては、新訂増補故実叢書として再刊されたが、新訂増補本は増訂本と比べると、内容上の増補は特に行われていない。
- (8) 内藤広前は寛政三年に生まれ、慶応二年に没する。幕臣であり、国学者でもあった。文政年間に至り、尾張藩主徳川斉朝の命を受け「大内裏図考証」の補正作業を行ったことで有名となる。他に「丹鶴叢書」の編纂にも加わった。
- (9) 固禪の経歴については、主に「裏松家譜」に拠った。
- (10) 「無仏斎手簡集」は藤原貞幹が彰考館総裁立原翠軒に宛てた書簡集で、その原本は天理図書館所蔵(二八九―イ六九)。刊本には「日本芸林叢書」九(六

合館、一九二九年、鳳出版、一九七二年復刊)がある。本稿での引用に際しては、原本の写真により校訂を行った。

(11) 高橋宗直の本姓は紀。江戸中期の故実家として著名な人物であり、御厨子所預・若狭守の職にあった。本文に記した著作以外にも、「太政官庁図考証」「寶石類書」など多数の編著がある。天明五年(二七五)八十三歳で没する。

(12) 『清紫両殿図考証』は無窮会神習文庫に写本一冊(四二三一)が所蔵される。当本は明和四年(一七七)に濱島等庭が高橋宗直の本を借用して写したものである。『清紫両殿別勘』も書名は異なるが、内容は『清紫両殿図考証』と同じであり、その写本は蓬左文庫に一冊(四一九一)、国立国会図書館に二冊(わ二一〇・〇九一・一七)が蔵されるほか、慶應義塾図書館魚菜文庫や静嘉堂文庫などにも所蔵される。なお蓬左文庫本は押紙による史料の追加が多く、草稿本の形態を示している。その書写奥書には、宝暦六年(一七五六)に宗直の直筆本を写した旨が記される。また国会図書館本の識語によれば、当本は宝暦十二年の作成になるが、これは草稿本を清書した年次を表しているものと思われる。

(13) 藤貞幹は享保十七年に生まれ、寛政九年に没する。江戸後期の故実学者・考証学者。日野家を先祖とする。本姓は藤原、通称叔藏、また無仏斎・蒙斎などとも号した。固禪の「大内裏図考証」作成に多大の助力をなし、水戸彰考館の修史事業にも与った。「古瓦譜」「七種図考」「好古日録」など多数の著作を持つ。なお藤貞幹については、吉澤義則「藤貞幹に就いて」(『国語説鈴』立命館出版部、一九三一年、初出一九一六・一七年)、古相正美「藤貞幹と周囲の人々」(『論集近世文学』5 秋成とその時代)勉誠社、一九九四年)、藤原貞幹「追悼号」(藤原貞幹友の会、一九九六年)所収諸論文等を参照。

(14) 藤岡通夫「京都御所」(彰国社、一九五六年)一一八―一九頁、一二四頁、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅲ』(一九六三年)三五―三六頁、註(5)西井論文。

(15) 『蒙斎手簡』は藤貞幹が柴野栗山に宛てた書簡集であり、現在は抄録本として伝わる。写本は立原翠軒所蔵本を小宮山楓軒が書写したものが静嘉堂文庫

に小宮山楓軒叢書(八五―七〇)として蔵され、その写しが国立国会図書館にも所蔵される。国会図書館本を底本とした翻刻が註(2)松尾a論文である。本稿では静嘉堂文庫本により校訂を行った。

(16) 京都御所東山御文庫には「閑院内裏図」一鋪(勅封一六七―一六)が蔵されるが、これには九条尚実の注記が所々に記されており、尚実自身も指図に関心が深かったようである。

(17) 『皇居年表』の「凡例」および「尚実公記」天明四年(一七六四)三月二十八日条。なお、『皇居年表』の編修過程については別稿を予定している。

(18) 内藤広前は、固禪の附図が断片的であったため、天保十一年(一八四〇)新たに「大内裏図」九鋪(京城略図・内裏図附中和院・真言院図・八省院図・豊樂院図・太政官図・神祇官図・武徳殿図・大学寮図)を作成した。現在、広前の自筆本「大内裏図」は、国立公文書館と静嘉堂文庫に蔵されている。

(19) 註(5)石村a論文では、「大内裏図」について説明するが、それは内藤広前が作成した図面についてのものであり、固禪作成の図面には触れられていない。

(20) 蓬左文庫本「大内裏図考証」全九十六冊(四七―一六)の中の補正本巻一上に記された「大内裏図考証補正のはしがき」(註(5)福田c論文参照)および故実叢書本「大内裏図」序文(註(5)石村a論文参照)。

(21) 註(14)藤岡著書。なお新訂版(中央公論美術出版、一九八七年)も参照。

(22) 註(5)西井論文。

(23) 註(5)西井論文で指摘されたように、「藤原直子」は春木家に嫁いだ固禪の娘である。

(24) 当本については、註(5)福田a論文で紹介されているが、附図四十四折についての言及はなされていない。本体の各冊には蔵書印(朱印)として「沢殿蔵書」や「崇道天皇御裔清原朝臣宣種」等が捺される。この内「沢殿蔵書」は幕末維新期の公家・政治家である沢(清原)宣嘉の蔵書印であるので、本稿では当本を沢宣嘉旧蔵本と称することにする。

(25) 註(5) 福田 a 論文。第十・十一・十五・十六・二十四・二十七・三十冊等の元素表紙右端に「丙寅」「丁卯」「戊辰」の注記があり、また第六十三・六十四冊の本文第一丁表に「文化三年」の校訂注記がみえる。

(26) 東京国立博物館所蔵『宮室図』には六巻本(P12354)と八巻本(P12355)が存するが、六巻本はさらに四巻と二巻に分かれ、四巻の方は松平定信所蔵本を文化年間に写したものである。『増補考古画譜』巻四や『東京帝室博物館美術課列品建築目録』(東京帝室博物館、一九二一年)一頁・九頁も参照。

(27) 『蒙斎手簡』天明八年書状(32・40・53)など。

(28) 「裏松家本」全体が裏松家から徳大寺家に移された時期や経緯については明らかでないが、安政四年(二八五)には固禪の菓子裏松恭光が裏松家本「大内裏図考証」の一部に奥書を記しているため、移動はこれ以後のことと考えられる。

(29) 註(5) 西井・吉田・福田 a 論文。

(30) 註(5) 福田 b 論文。

(31) こうした分類基準は、主に註(5) 吉田論文および同氏執筆「大内裏図考証」(『日本史文献解題辞典』吉川弘文館、二〇〇〇年)に拠った。

(32) 従来、裏松家本 I 段階に属する稿本は全て固禪自筆とされてきたが、その中には一部もしくは大部分が藤貞幹の筆跡と判断される冊が多く見出される。

これは本文で後述する京都府立総合資料館所蔵本や刈谷市中央図書館所蔵村上文庫本の I 段階でも同様であり、固禪と貞幹の共同作業の痕跡が I 段階(第一次稿本)から現れている。その意味で、柳原紀光の「閑窓自語」(中 三十七)において、「大内裏図考証」は貞幹が大略作ったとの説が伝えられることも理解されよう。

(33) 但し III 段階としたものでも、正編の第五十三・五十六・五十九・六十五・六十六の五冊および続編の第七十九・八十一の二冊は、さらに後の写本である可能性があり、現在、吉田早苗氏により再調査が行われている。

(34) 下書本には表紙右下に青紙が貼られている冊が多く、外形上より下書本を特定する一つの基準となっている(吉田氏の御教示による)。

(35) 『京都府立総合資料館貴重書目録』(一九七一年)四五〜四七頁。

(36) 資料館本の下書本にも、二十二冊内の十四冊には裏松家本と同様の青紙が表紙右下に貼られている。

(37) 東京大学史料編纂所所蔵『隆光卿記』(二〇七三―一六六)。

(38) 註(1) 桜井論文。

(39) 固禪関係史料の写本の内、広橋家旧蔵のものは、現在国立公文書館に数点が所蔵されている。

(40) 村上文庫本は、刈谷藩医村上忠順(二八三―一八六)が蒐集した和漢の古典籍群で、蔵書数は約二万五千冊といわれる。現在は刈谷市中央図書館に一括して所蔵されている。村上忠順については「10年のあゆみ」(村上忠順翁顕彰会、一九九九年)参照。

(41) 註(5) 福田 a 論文。

(42) 刈谷市中央図書館村上文庫には、天明年間の日野家について記した聞書である「和歌問答」二冊(二五七五)も所蔵されているので、村上文庫本は資料館本から分かれた可能性の方が高いかと思われる。註(13) 古相論文も参照。

(43) 書陵部所蔵の沢宣嘉旧蔵本「大内裏図考証」には I 段階の写本が計十四冊あり、この内、裏松家本・資料館本共に I 段階の冊を欠く写本としては、巻二・十上・同中・同下・同附録の四冊がある。また春木文庫本の巻十七は固禪自筆書写本であり(註(5) 西井論文)、III 段階の一本に相当するものと考えられる。なお I 段階の他の稿本については、末尾の補註を参照。

(44) 史料蒐集の問題については、例えば静嘉堂文庫所蔵引馬文庫旧蔵本の「大内裏図考証引書目録」に約五百件の引用史料名が掲載されており、大凡の蒐集史料が判明する。史料借用の例として、「雲図抄」ほか諸史料を高橋宗孝から借りていることが「御厨子所預日記抄」(慶応義塾図書館所蔵魚菜文庫本(二四二―一〇〇一))天明八年(二七六)二月十八日・十九日・六月十三日条など

からうかがえる。なお史料借用の実態に関しては、註(2) 伴瀬論文も参照。

- (45) この点については、内藤広前も「広前按、この弘文院見別録とあれども、廿四巻の別録と云もの、此冊中に又見えず、疑らくは当巻の脱編なるべし、よっていさ、か茲にしるして、以て後人の全本を得て補ふをまつべし」と按文を付している(故実叢書本)。しかし、裏松家本続編第七十三冊は表紙に「大学寮別録歟」と後筆されており、本冊は「大学寮別録」をまとめる前段階の稿本とみられる。

- (46) 『蒙齋手簡』天明八年書状へ53・55・寛政三年書状へ84、「無仏齋手簡集」寛政二年三月十三日付・六月九日付・八月二十一日付書状など。

- (47) 『無仏齋手簡集』寛政元年十二月十日付・同二年正月二日付・同年二月二十五日付・同年六月晦日付・同四年七月八日付・同年八月二十八日付書状、「蒙齋手簡」同三年書状へ104など。また、註(2) 松尾b論文、註(13) 古相論文も参照。

- (48) 『無仏齋手簡集』寛政四年三月十日付書状、「蒙齋手簡」同六年三月付書状へ155など。

- (49) 下書本の表紙には、書写者の略号を朱書しているものが何冊かある。

- (50) 註(5) 福田b論文。

- (51) 唐櫃は檜製で、全五十冊を二列に重ねて収納する容量を持つ。櫃には「政書」第十九号、「甲二百八号」「函四百七十八」「大内裏図考証五十冊」などと記された貼紙がある。

- (52) 蓬左文庫本の内訳は註(5) 福田c論文にみえるが、正確でない部分があるので、以下に記す。全九十六冊はまず被校訂写本六十五冊と補正本三十一冊に大別される。そして被校訂写本は正編の引書目録一冊・目録三冊・本体四十七冊(巻三上の一冊を欠き、巻十九が上・下の二冊になる)と続編の別録十冊・同二冊・続録一冊・続大内裏図考証一冊に分かれる。また補正本は正編の引書目録一冊・目録三冊・本体二十六冊(巻一上・十四へ有欠、二十下附録)と続編の続大内裏図考証一冊(撰関以下第二)に分かれる。補正本における

正編の二十冊余りと続編の大部分が現存しないことは残念である。

- (53) 旧故実叢書本では底本の明記がないが、冒頭に「宮内省本および図書館本等によりて比較校訂し尚疑はしきは原書に遡りて訂正したり」と記すことから、蓬左文庫本あるいはその写本を底本に用い、これを宮内省本・帝國図書館本等で校訂したものである。また増訂版故実叢書本の「凡例」では、さらに内閣文庫本を校訂に用いたと記す。

- (54) 東京大学史料編纂所所蔵「定功卿記」(二〇七三―一三三八)。天保三年七月十七日条より同六年正月二十七日条までに三十三回ほど所見する。

- (55) 佐竹朋子「学習院学問所設立の歴史的意義」(京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編)二号、二〇〇三年。

- (56) 太田静六「寝殿造の研究」(吉川弘文館、一九八七年)一四〇―一四二頁、八五三―八五六頁。藤本孝一「裏松固禪編『院宮及私第図』(清書本)二巻」(『古代文化』三九巻一一号、一九八七年)。

- (57) 『蒙齋手簡』寛政七年十二月一日付書状へ208、「桂宮日記」寛政八年十月五日条、十二月二十八日条など。また註(3) 小沢論文参照。

- (58) 高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」(『日本史研究』三一九号、一九八九年)。

- (59) 『立后雑事抄』について、註(1) 桜井論文では明和八年(二七二)の立后(二条富子の立皇太后)記事がないとしてそれ以前の成立かとしているが、本書には同年および安永十年(二七二)の立后記事(近衛維子の立皇太后)もあることから、その次の欣子内親王立后(寛政六年)に際してまとめられたものと考えられる。

- (60) 『御産記』全八冊は、固禪が「礼儀類典」を参考にして、独自の編目を立てて編修したものである。

- (61) 個々の殿舎については以下のような研究がある。清涼殿Ⅱ註(3) 島田著書、仁寿殿・常寧殿・紫宸殿Ⅱ鈴木亘「平安宮内裏の研究」(中央公論美術出版、一九九〇年)、綾綺殿Ⅱ福田敏朗「平安内裏の綾綺殿について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』一九八〇年)。

固禪著作一覧表

No	著作名	頁数	成立年次	所蔵機関(函号など)
1	うち出の派の日記註釈	1巻		東大史料編纂所(*)
2	○伊勢公卿勅使部類	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
3	院宮及私第図	2巻	天明8年頃か	古代学協会
		4巻		東京国立博物館(P-2403)、宮内庁書陵部(B7-462)
4	移鞍(附、年中行事絵移鞍)	1冊	享和3年	国立公文書館(古42-720 広橋本)、岩瀬文庫
5	○宇佐神宝勅文	1冊	享和3年	東大史料編纂所(* 裏松家本)
6	裏松固禪勅物	1冊	寛政5年頃か	東北大学附属図書館(狩3-4729-67、壬生記録の内)
7	○衛士装束	1冊	享和2年	東大史料編纂所(* 裏松家本)
8	円座事	1冊	寛政8年以後	国立公文書館(古42-726 広橋本)
9	御産記	8冊	寛政11年頃か	東大史料編纂所(裏松家本、徳大寺本)、筑波大学
10	御引直衣之事	1冊	寛政11年	明治大学(*)
11	額事	1冊		京都大学文学部図書(国史一た3-3)
12	○寛午類聚(胡飲酒之事)	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
13	○寛午類聚(本陣座、公卿座、同飯座)	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
14	○寛政還宮新造調度	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
15	宮室図	8巻		東京国立博物館(P-2315)
16	公卿勅使類聚	1冊		宮内庁書陵部、東大史料編纂所(* 裏松家本)
17	皇居年表(正編)	5冊	天明4年	東大史料編纂所(*)、宮内庁書陵部ほか
18	皇居年表(続編)	5冊		東大史料編纂所(*)、宮内庁書陵部ほか
19	興索英袋菊瓶	1冊		明治大学
20	○小胡秤	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
21	集	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
22	入内雑事抄	1冊	寛政6年頃か	静嘉堂文庫(*)、国立公文書館(145-1280)、国会図書館、宮内庁書陵部、東大史料編纂所(* 裏松家本)
23	旬御装束	1冊		宮内庁書陵部(葉-1481)
24	承塵	1冊		国立公文書館(古42-724 広橋本)、宮内庁書陵部、京都府
25	新造内裏還幸次第(還幸新造内裏次第)	1冊	寛政2年頃か	国立公文書館(145-1007 甘露寺本)、宮内庁書陵部(264-12 ほか)
26	新造内裏還幸次第部類	1冊		宮内庁書陵部(柳-259 ほか)
27	神拝事	1冊	寛政12年	(和田英松氏旧蔵)
28	清涼殿図考証	1冊		静嘉堂文庫(538-4)
29	銭形屏風勅物	1巻		宮内庁書陵部(C8-142)
30	銭形屏風仕方	1巻		宮内庁書陵部(C8-98)
31	○還幸之後御手水次第	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
32	還宮雑事抄(還幸雑事抄)	1冊	天明8年より抄出	国立公文書館(145-1011 坊城本)、宮内庁書陵部(柳-257, 350-14 ほか)、国学院大学
33	宣旨雑事抄	1冊		国立公文書館(古42-725 広橋本)
34	草庵集啓蒙	6冊	宝暦12年	京都大学文学部図書(* 国文学-Eq-9C)
35	大床子次第	1冊	寛政5年	京都府
36	大内裏図考証(正編)	50冊	寛政9年	東大史料編纂所(*)、京都府立総合資料館(*)、宮内庁書陵部(*)、刈谷市中央図書館(*)ほか
37	大内裏図考証(続編)	不定		東大史料編纂所(*)、宮内庁書陵部ほか
38	新嘗会部類	3冊		京都大学附属図書館(菊-シ-101)
39	新嘗祭	1冊		宮内庁書陵部(109-401)
40	新嘗祭備忘(新嘗祭雑事抄)	3冊		国立公文書館(145-533 甘露寺本)、静嘉堂文庫、明治大学、東大史料編纂所(裏松家本6冊)
41	新嘗祭部類	1冊		宮内庁書陵部(109-644)
42	○錦籠籠吊燈	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
43	入道固禪進勅物	2冊		静嘉堂文庫(537-30)
44	秤	1冊		(和田英松氏旧蔵)
45	○秤賀(秤儀君儀)	1冊	寛政11年	東大史料編纂所(* 裏松家本)
46	○法体人神事儀	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)
47	法体装束雑事	1冊		(和田英松氏旧蔵)
48	肩之事儀黒之事	1冊		国立国会図書館(213-425)
49	立后雑事抄	1冊	寛政6年頃か	静嘉堂文庫(*)、国立公文書館(145-1281 甘露寺本)(古42-754 広橋本)、宮内庁書陵部、東大史料編纂所(* 裏松家本)
50	○立后日大床子御膳次第	1冊	寛政6年	東大史料編纂所(* 裏松家本)
51	○童殿上并元服雑事抄	1冊		東大史料編纂所(* 裏松家本)

註1) 【図書録目録】「裏松家記録目録」等より作成。
 2) 指図類および母子形態でない勅物・勅文は除く。
 3) 配列は50頁順。
 4) 本文の註1欄井論文に記す和田英松氏旧蔵史料(No27、No44、No47)は所在未確認(大正12年に焼失か)。
 5) 「著作名」欄の○印のものは、西村慎太郎氏作成の表「裏松家文書目録一覽」(同氏平成15年8月科学研究集報告「寛政期有司の勅向と裏松固禪」所収)による。
 6) 「所蔵機関」欄の*印は固禪自筆本を示す(白紙が一部のものも含む)。
 7) No25とNo26は同一内容、No39はNo41の一部抜粋、No50には「還幸日大床子御膳次第」が合冊される。

〔補註〕成稿後、小倉慈司氏の御教示により、早稲田大学図書館所蔵の外記平田家資料の中に「大内裏図考証(稿本)」一冊(イ四一四七八一―一七)が存在することを知った。表紙に「大内裏図考証 稿本/官舎 神祇官以下」と記されるように、本書は「大内裏図考証」の巻十九(三十)に相当する稿本であり、本稿で述べた編修段階に当てはめると、0段階に属するものといえる。料紙には「礼儀類典」の反故紙を翻して使用しているが、直接この料紙に記事を書き加えておらず、別の紙片に記事を書き加えておき、それを順次貼り付けて作成している。本文記事の大部分は藤貞幹の筆跡と認められ、所々に付された押紙の注記は固禪の筆とみられる。本書は「大内裏図考証」巻十九以下の初期の編修状況

を知る上で貴重なものであり、また固禪と貞幹の共同作業の様子がうかがえる点でも興味深い史料である。なお詳細については機会を改めて検討したい。

〔付記〕 本稿は、東京大学史料編纂所の吉田早苗氏を研究代表者とする科学研究費による研究(「近世公家社会における故実研究の政治的社会的意義に関する研究」平成一四年(一六年度)の成果の一部である。関連史料の閲覧等については、吉田氏をはじめ、各史料所蔵機関の関係者の方々に大変お世話になった。末尾ながら厚く御礼を申し上げる次第である。